
逆行した日

水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆行した日

【Nコード】

N9232X

【作者名】

水

【あらすじ】

数十年が経った未来で、このかを失ってしまった刹那は、どうい
うわけか中学二年生の終わりに戻ってきていた。このかを失わない
未来を目指して、刹那は歩き出す

まえがき

まえがき、ということ。最初に一言。

趣味と自分の好みで書き始めました。なので、話の構成、全体の物語の構成が雑な部分が多々あると思われる。

そのあたり、スルーしてくれると助かります。

他二つのネギまの連載でネタ詰まり……で、ポツと浮かんで書き出したら楽しくなってきた息抜きです。

更新速度は他二つの進み具合というか進行の調子によって変わりますので、気長に付き合って下さると助かります。

それでは、趣味と好みで物語の着地点が見えないお話でよろしければ……。

過去に戻った日

火の手が上がる。屋敷のあちこちで、燃え上がる炎を掻い潜り、私は走る。

目指すは一番奥、私が護ると誓った彼女の元へ。

「お嬢様!」

長、と呼ばうとするたびに止められた。名前で呼んでと言われて、駄目ですと困ったように笑えば、不満げにしながらそれでも、この呼び方を許してくれた。あの頃に戻れたような、気分になれるのだと。今は遠い友達を思い出せると、懐かしそうに言った。

部屋の襖を開き、驚く。既に炎はここまで及んでいて、部屋の中心に二人の男女がいた。

「」覚悟……!!」

絞り出すように男が言って刀を振り上げる。女は、悲しげに目を閉じていた。

駆け出し、腰に差した刀を抜く。十年以上愛用し続ける相棒が牙をむいて、男に襲いかかった。

「神鳴流 斬岩剣!!」

後ろからは武道に反する、そんなことを思って、それがなんだと、思い直した。

背中から血を噴出して男が倒れる。女はゆっくりと目を開けて、私を見た。

「せつちゃん」

「お嬢様……よかった、ご無事で」

逃げましょう、と手を差し出した。外は敵だらけ、急がなければまた襲われる。他の仲間が食い止めてくれてるうちに、早くと。

けれどその手を、お嬢様は首を振って拒絶した。立ち上がり、座ったままで。なあ、と話しかけてくる。

「もう、手遅れみたいや」

「いいえ、まだ間に合います。とにかく、今はもう逃げましょう」

「手遅れなんよ。うちの体に、毒が入ってるから」

毒、ということとは食事を用意した女中たちも、敵だったというわけで。それは今となっては後回しの真実。

お嬢様にとって、毒は意味をなさないので。なぜ、と。

「……魔法がな、使えないんよ」

「え……」

「たぶん、結界やな。魔法を使えなくする。媒介がどこにあるのか、もう分からん」

治癒魔法を使えば解毒できる毒も、魔法を使えなければ意味が無い。お嬢様の口ぶりだと、今から別の方法で解毒を行おうとしても、間に合わないのだろう。絶望的だった。

「そん、な……」

口の中が乾いていく。どうして、お嬢様がこんな目に合ったと、誰かを責める。

そんな私に、お嬢様は、とても綺麗な笑みを浮かべた。

「結局、お父様も、うちも、東と西を仲良くさせることは出来なかった」

「そんなことありません。だって、和解を成立させたのは、お嬢様じゃないですか……」

「紙面だけの、協力しましょうって綺麗な言葉を並べただけの和解や。みんな、東に下ったのだと、怒った。せつちゃんも、知つとるやる？」

「それは……」

東を倒せと、叫ぶ声は収まらなかった。それどころか、お嬢様が長となつてからは、さらに酷くなったように思う。表面上は穏やかで、けれど水面下は荒れ狂つていて、怒りと恨みの声は静まることを知らなかった。

「……うちが、過去に仮契約してたのも、原因やろうなあ」

「……そう、ですね」

否定の言葉を、吐けなかった。お嬢様は、もう全て分かっていた。西洋魔術師との仮契約を、今はもう解除しているとはいえ、行つていた。東の者の、従者だった。

それが、水面下で暴れていた者たちを、刺激した。彼らにとって、お嬢様は西ではなく、東に組みする者となっていた。

反発はあつたけれど、それでもお嬢様は長となられた。東と西の関係を良くしようと、尽力した。それが余計に、いけなかった。

和解が成立し、彼らはお嬢様を敵とした。そして、敵は滅ぼすのだと、叫んだ。

「ゴホッ」

「お嬢様!！」

咳き込んだお嬢様の体が倒れる。支えたその体は冷たく、口から血が溢れていた。もう、限界なんだろう。

悔しさに唇を噛みしめる。刀を握った手に力が籠る。どうしてと、もう意味を成さない問いが頭の中で繰り返される。

どうして、このちゃんがこんな目に合うんだと、何もかも遅い、今になって。

「はっ…せつ、ちゃん……」

「お嬢様……」

「みんな、はな……西を、守りたいだけ、なんや。それは、うちも、みんなも…同じ、気持ち」

「はい……わかって、ます」

「せやから、お願いや……みんなのこと、恨まんとして」

「それ、は……」

このちゃんをこんな目に合わせた人を、恨むなど。たしかに彼らは彼らなりに、西を守るうとした。その結果が、このちゃんをこんな目に合わせた、それだけのことなのかもしれない。

でも、許せることじゃない。だってこのちゃんは、私の大切な親友だから……許せるわけが、ない。

「うちな、みんなに…せつちゃんにも、みんなにも、傷ついてほしくないんよ」

「でも、お嬢様……」

「うちが守りたいと思ったのは、西とかそんな大きなもんやなくて、みんなや。東と仲良くすれば、守る力が增える、みんなを守ることが出来ると思ったんやけど……駄目やった、みたいや。急ぎすぎたのかも、しれんな」

「……間違つてなんか、いませんよ。私が、保証しますから」
「ほんま？なら、よかつたえ……」

東と和解するのは、間違つてなんかいなかった。ただ、それ以外の
たくさんのことが、間違いだつた。でも、それは言いたくない。言
えない。それなのに、このちゃんは自分で、言ってしまう。

「うちじゃ、駄目やつたんや……」

「お嬢様……」

「うちは東に近すぎたんや。何も知らなかつた、あの頃にうちは、
間違いを犯してしもた」

無知とは時に罪である。そして世の中には、知らなかつたですまさ
れないことがあるのだと、今になって私たちは思い知らされる。絶
望の中で、つきつけられる。

「後悔は、してへんけど……うちは、知らなきゃあかんかつた」

「……そう、ですね」

「仮契約、な……うちは、絶対にしては、ならなかつたんよ」

「……ええ」

何も知らず、後のことも何も考えず。ただ、その一瞬の為に。
知っていれば、別の道があつたかもしれない。けれど知らなかつた
私たちは、その道を選ぶほかになくて。
あの数年間で得た絆は、かけがえのないものだつたけれど、本当に
これでよかつたんだらうか。

「……なあ、せつちゃん」

「はい」

「名前……呼んでえな」

開けているのもつらいだろう目を、開いて。伸ばされた手を、強く握り返した。

「この、ちゃん……」

「もつと……」

「このちゃん……このちゃん、この、ちゃん……」

「……せつちゃん」

嬉しそうに、笑って。握った手から、力が抜けた。

すり抜ける手を掴もうとして、それなのに掴めなくて、落ちていく。目が、閉じられた。

「この、ちゃん、このちゃん、このちゃん!」

揺すっても、叫んでも、このちゃんは目覚めない。目を開けてくれない。

「ああ、あ、あああああ　　! ! ! !」

慟哭、それが正しいのだろうか。溢れる涙を拭うことも出来ず、このちゃんの体に縋り付いて、泣いた。

「どうして、どうして! !」

何を間違えていたのか。取り返しのつかない間違いを犯したのは、あの頃で。もう、遅すぎた。後悔も、懺悔も、今更になってしまった。無知が罪だと、気づくべきだったのだ。

結局、私は名前の通りに、刹那を生きるだけで、先のことなんて見

ていなかった。止めればよかった、そうすれば、こんな未来ではなくて、違う未来へ続く道を、選べたかもしれないのに。私も、このちゃんも、間違えてしまったのだ。

「ごめんっ、ごめん、このちゃん。ごめん……」

体が熱い。火が、すぐそばで燃えている。逃げることは出来るだろうか。出来ないかもしれない。でも、逃げるつもりはなかった。私はもう、ここで終わる。

「私も、すぐに行きますから」

護れなくてごめんと、謝ることしか私には出来ない。

「刹那!!」

切羽詰まった龍宮の悲鳴に閉じていた目を開けた。目の前に迫る巨大な斧と、それを振り下ろす鬼がいる。瞬時に状況を確認。右手には愛用の刀、周りには十数の妖怪。龍宮はそのうちの数体に囲まれて動けない。服を見下ろす。中学の頃に着ていた裏の仕事用の仕事着。

「……え？」

思考時間はコンマ数秒。変わらず迫りくる斧をすりりと避けて鬼の懐に入り、横薙ぎに刀を振るった。

「どうして、私は……」

「刹那、ぼんやりしている暇は無いぞ！」

「あ、ああ……」

突拍子もない事態に、記憶が混乱して意識がぐちゃぐちゃだ。龍宮への返事も、どうにも気の抜けたものになりがちで、これでは駄目だと意識を無理矢理に切り替える。

どうにも状況が呑み込めないが、これが仕事で、今が戦場だだけ考えればいい。落ち着きさえすれば、長年の経験が勝手に気持ちを切り替え、体を動かしてくれる。

「っし、はあああ!!」

振り上げ、振り下ろし、振り抜き、突き刺し、突き上げ、薙ぎ払う。数は多いが、それほどの強さでも無い。だが、麻帆良に侵入してくる妖怪にしては強い。先生方なら心配は無いだろうが、生徒だと苦戦するかもしれないな。

「神鳴流　　雷鳴剣！」

粗方斬り捨て、残りは雷で一掃する。視線を巡らせ、辺りの気配も確認するが、私たちの管轄の分は終わったようだ。龍宮の方を確認すれば、ちょうどそちらも終わったらしい。

「お疲れ」

声をかける。とても不思議そうな目で見つめられて、首を傾げた。というよりも、私はいったいどうしたというのだろう。改めて自分の姿を確認すれば、やはり着ているのは中学の頃の仕事着で、持つ

ている刀は夕凧だった。おかしい。

「刹那、でいいんだよな？」

「……当たり前だろう。何を言い出すんだ」

おかしいことを言い出す龍宮。そもそもなぜ、彼女がここにいいのか。いや、違うか、ここにいていいんだ。別におかしくない。前に一緒に仕事をした時も相変わらずの腕前で

あれ？

前っていつだ。確か半年ほど前に一緒に仕事をして、随分と会っていないかったからいろいろと話をしたはずだ。なのに、何故だ。昨日も会った……いや、というよりも今日、学校で、普通に同じクラスで先生の授業を

「おい、刹那？」

「ッ……」

どうした、そう問いかける龍宮を見上げる。おかしいな、こんなにこいつと身長差があったか？私も背が伸びてもう少し縮まったはずなのに、でもいつもこんな風に見上げていたような。

分からない。私は、いったいどうしたんだ？何を覚えている？

「た、龍宮……」

「……さつきから様子がおかしいな。いったい、どうしたっていうんだ」

「そ、の……あ、ああ、そうだ。このちゃんの事なんだけど……」

「近衛？」

「そ、そうだ……」

このちゃん、その名前を口にして激しく頭の中を揺さぶられるような、そんな衝撃に襲われた。何十年分の記憶が纏めて、滝のように

流し込まれる。そんな感覚。

燃える炎の熱さ、嘗ての仲間を斬る感触　　抱いたこのちゃんから伝わる、冷たさ。

ああ、駄目だ。ぐちゃぐちゃの記憶がさらにぐちゃぐちゃで、ぐるぐる回っている。思わず頭を抱えて、その場にしゃがみ込んだ。

「珍しいな、お前がお嬢様と呼ばないなん　　っおい、刹那？どうした、大丈夫か？」

お嬢様、ああそうだ。私は今も昔もこのちゃんをそう呼んでいて……今も、昔も？昔なのか？未来では無く？いや、そもそも今とは何時だ。

それに变だ。このちゃんは死んでない、だって今日も神楽坂さんやネギ先生と一緒にいて、私はそれを見守って……でも、確かにこのちゃんは死んだ。冷たいこのちゃんの体に縋った感覚は消えない。擦り抜けて行った手を掴めなかったあの瞬間を、私は覚えている。なんなんだ？このちゃんは死んだ？それとも生きてる？分からない、私に何が起こっている？

「龍宮、頼む。教えてくれ……」

震える声を絞り出して、心配と不審を宿す目で私を見る龍宮の腕を掴み、引き寄せる。その力に驚いたように目を見開かれて、そんなことを気にすることも出来ずに私は叫ぶように問うた。

「今はいつたい、いつなんだ　　！？」

流れ続ける記憶の濁流に、私はもがき続けるしかなかった。

過去に戻った日（後書き）

仮契約が原因かどうかとかそのあたりは触れない方向で……あくまで、もしかしたらこうなっていてもおかしくない？という世界です。とりあえず、刹那逆行。主役は刹那です。

色々変わった日

目を覚ますと、外はまだ暗かった。二月ももう終わり頃、太陽の昇りは遅い。

二段ベッドの上から飛び降りて、部屋を見回す。見慣れたような、懐かしいような、そんな気分になって、その違和感にこめかみを指先で叩く。

「ん、刹那…随分と早いな」

「ああ……おはよう、真名」

後ろで欠伸をかみ殺して起き上がる真名に、そう返事を返す。

昨日一晩、真名には随分と付き合ってもらった。全てを話したわけでは無いが、私が多少なりとも『未来』の記憶を持っていることは話してある。

そう、未来。このちゃんが死んでしまう、あの未来だ。私はどうやら、中学二年生の頃にまで戻ってきたらしい。

らしい、というのは、もしかすればこのちゃんが死んでしまう未来は、中学二年生の私が見た夢かもしれないからだ。数十年という長い夢を、生死を賭ける戦場で見たというなら、修行のやり直しが必要だろう。

だがもし、本当に私が過去に戻ってきたのなら　私は、このちゃん死な未来を回避する。絶対に。

「ああ、真名。朝食は和食でいいか？」

「……………作れるのか？」

「……………え？」

不思議そうに問いかけられて、首を傾げる。ああ、そうか。この頃の私は、剣の修行とこのちゃんを守ろうとすることばかりで、料理なんて作れないんだった。

何時だったか、このちゃんに手料理が食べたいと駄々をこねられて、それから色々と練習したんだったなあ。今じゃ結構な種類の料理が作れるようになった。味はこのちゃんのお墨付きで。

「まあ、一応な」

「それなら、任せようかな」

面白そうに笑う真名に任されて、私は朝食作りを始めた。

「……美味しいな」

「そうか。よかった」

ご飯に味噌汁、焼き魚にほうれん草の胡麻和え……何の変哲も無い普通の朝食。それでも、味の好みもあるし僅かに緊張していたが、真名の感想にほっと安堵の息を吐く。

「これなら毎日食べたくなるな」

「別に構わないぞ？ああ、後、一応弁当もお前の分作ってあるが、どうする？」

「もらう」

即答されてちょっと驚いた。まあ、それだけ気に入ってもらえたってことだろうし……いいか。

それから、朝食を食べ終え学校の準備も終わらせて、私は机の前に座っていた。やはり早く起きすぎたようで、時間にはまだまだ余裕

がある。もしかして、真名も早起きさせすぎたかなと少々罪悪感に襲われるが、当の本人は私の後ろで銃の手入れをしている。朝から誰か訪ねてくることは無いと思うが……いいのか、そんな堂々と。

「さて、と……」

そんなことを言う私の横にも、鞘には入れているとはいえ夕凧が立てかけられている。

机の引き出しを漁り、いくつか目当ての物を取り出して並べる。白紙のお札と筆と紐。紐は後で使うとして、まずはお札と筆だ。

深呼吸を繰り返して気を落ち着かせる。これからするのは、お札を作る作業だ。基本的なお札は、専用の紙に気を籠めて文字を書くことで、その文字に力を持たせる。お札作りを専門にする職人も、裏の世界にはいる。腕の立つ者が作れば、その分強いお札が出来上がる。

私にはそんな技量は無く、作れるのはこの一種類だけだ。お札作りは、それに関する幅広い知識が必要になるからな。

筆に墨を付け、ゆっくりと書きつける。むらなく気を籠め続け、決して文字を間違えないように慎重に書いていき　　出来上がる。

「ふう……」

戦闘で気を使うのとはまた違った使い方だ、酷く疲れる。筆を仕舞い、出来上がったお札をもう一度確認する。書き間違えも無いし、気の状態もいいな。

今度は夕凧を手に取り、それを分解する。手入れの時に分解して行うから、これ自体はいつものことだ。

違うのは、刀身の根元、柄に差し込む部分に、今作ったお札を巻きつけることだ。

「刹那、何をしているんだ？」
「ん？ああ、見ていれば分かる」

鞘に戻し、見た目は何も変わらない夕凧。私は少しだけ気を籠めて、口の中で言霊を唱えた。
一瞬の後に、夕凧の姿が消える。私の右手には、赤い勾玉が残っていた。

「それは…？」

「夕凧だ」

「は？」

首を傾げる真名。まあ、これだけ見ればそんな反応をされても仕方ないと思うが。

私は立ち上がり、今度はその勾玉に気を籠める。それだけで今度は、夕凧が私の手に握られていた。

「……」

「さっき作ったお札の効果なんだ。こうしておけば、持ち運びが楽だろう？」

また夕凧を勾玉に戻して、取り出しておいた紐を穴に通して輪を作る。それを手首に引っかければ、何の変哲も無いブレスレットだ。数十年も生きればいろいろ学ぶというか……獲物を持って誰かを護衛するのは無理があると学んだ結果の行動だった。何があったかは聞かないでほしい。

「ん？……おい、真名。どうした、ハトが豆鉄砲食らった顔してるぞ」

「…………いや。本当に刹那なのかと思ってね」
「…………ああ。私は桜咲刹那だ。まあ、ちょっと変わったかもしれないが…………」

手首に光る勾玉を撫でる。変わった、と思われても、仕方ないのかもな。

なんやかんやでのんびりと過ごしていた結果、早起きしたわりに普段と変わらない時間に学校に来た。このちゃんは…………まだ、来ていない。

正直、未来を変えようと思っているのに、踏ん切りがつかないでいる。いや、変える決意はもうしているのだが…………今のこのちゃんに話しかけてもいいんだろうか。どうするのが一番いいのか、分からなくて…………ただ、このちゃんの元気な姿を早く見たいと、それだけを思っている。

「おおっ!?!」

とりあえず、席に座って時間が過ぎるのを待っていたら、後ろの方で驚いたような声があがって振り向く。クーフェイが、期待に満ちた瞳でこちらを見ていた。

「……………」

周りを見る。いつもと変わらず、クーフェイが喜ぶようなものは無い。肉まんを売ってるのはあっちだし…………何を見ているんだろう。

「刹那!?!」

「おはよう、クーフェイ。どうかし」

「勝負するアル!!」

「はっ?」

ズダダと駆けてきて開口一番、勝負。意味が分からず首を傾げれば

「その勝負、拙者もお願いしたいでござるな」

「長瀬!?!」

声が聞こえたかと思えば、シュタツと目の前に着地。やけに楽しそうに笑っている長瀬に、目を輝かせて構えているクーフェイ。何か話したのかと真名の方を見れば、面白そうに笑ってはいたものの首を振られた。

「クーフェイ、長瀬。いきなりなんだ?勝負ならこの前も手合わせをしたばかりだろ?」

「刹那の気配が昨日と違うネ!だから、勝負アル!!」

「いや、意味が分からん」

「一晩にして随分と強くなったようでござるからな、是非とも手合わせ願いたい」

「いや、だから……」

はた、と思いがたつて言葉に詰まる。

昨日、一晩で。私の身に起きたことを考えれば、何となく二人の言いたいことが分かる。見た目に変化は無くとも、内面に随分と変化が起きている。数十年分の記憶と、それに伴う経験。

……自分では分からなかったが、もしかしたらそういう意味で昨日の私と違っているのかもしれない。だから、真名は何度も聞いてきたのか。本当に刹那か、と。

「…………悪いが、今度にしなにか？さすがにここだと…」

「なら外に行くネー！」

「いや、これから授業が…」

「放課後ならいいでござるか？」

「今日は、ちよつと……………」

まだこのちゃんに会うかとか、いろいろ考えたいのに。困り果ててどうしようかと思って、辺りを見る。騒ぎすぎて注目されていた。

「うゝ、じれつたいアルヨ！」

「つちよ！？」

我慢できなかつたクーフェイが拳を突き出してきて、驚きながらも右手で受け止め、そのままクーフェイの体のバランスを崩させる。

「うわつと」

体勢を立て直される前に、あと長瀬にまで何か仕掛けられる前に、二人の間を擦り抜け教室の後ろへ逃げる。口笛やら囃し立てる声が聞こえたが、この際無視だ。今はとにかく、あの二人を大人しくさせてこれからのことを

「せつちゃん？」

「ッ……………！？」

懐かしい声、普段から聞きなれた声。呼ばれ慣れた名前、呼ばれないようにしていた名前。

戻ってきた自分と、昨日までの自分が、頭の中で混乱する。声を聞こえた方を向けば、驚いた様子のこのちゃんと、目が合つて。

「あ……」

声が出ない。目が熱くて、なんでだろう、手が震える。

「お、おはよ、せつちゃん」

緊張したみたいに、このちゃんがおずおずと声をかけてきて

『あ、せつちゃん。おはようさん』

目の前のこのちゃんよりも大人びたこのちゃんの声が、頭の中で木霊する。

面影が重なる。目の前のこのちゃんは間違いなく私の知るこのちゃん、それがこの上なく 嬉しい。

「この、ちゃん……」

「！！せつちゃ、うちのことわわっ!?!」

気づいたら、このちゃんの手を握って、教室から飛び出していた。擦り抜けてしまった、掴めなかった右手の温かさに、涙が零れた。

半ばこのちゃんを引きずるようにして走っていることに気づいたのは、教室を飛び出してだいぶ走ってからだだった。

「い、ごめんっ、このちゃん……!」

階段の踊り場で慌ててブレーキをかける。握っていた手を離そうとすると、息を荒くしたこのちゃんが握りしめてきて、離せなかった。

「え、ええよ、大丈夫やから。にしても、せつちゃん足速いなあ」
「……………ううん、そんなことないよ」

静かに首を振る。ああ、でも、懐かしい。昨日まで確かに見ていた筈なのに……………遠目から見ていただけだから、なのかもしれない。正面から、こんなに近くでこのちゃんを見たのが、随分と昔の事になっている。

「……………このちゃん」

「うん？」

「っこのちゃん…!」

「わっ、せつちゃん……………?」

思わず抱き着いてしまった。だって、このちゃんが目の前にいる。私前で死んでしまったこのちゃんが、こうして生きてる。それがとても嬉しくて、そして同時に襲ってくる 後悔。

「護れなくてごめんっ、ごめん、このちゃん…私、私はっ……………」

「せつちゃん……………」

「っ絶対に、護る、から!…このちゃんを、護って、みせるから……………」

目の前のこのちゃんは、私の目の前で死んだこのちゃんじゃないと分かってしているのに。

溢れだす涙と言葉を止める術を、私は知らなくて。そんな私を抱きしめてくれるこのちゃんを、今度こそ護りたいと、護ってみせると、誓った。

「なあ、せつちゃん」

「ふっ…はい……」

「うちはな、せつちゃんがどうして泣いてるのかとか、分からないんよ」

「分からなくても、いいんです。私が、勝手に泣いているだけ、だから」

「それは、うちが嫌や。うちは、せつちゃんのこと知りたい。話せなかった時間の間に、せつちゃんがどんなことをしてて、どんなふうに思ったのか、知りたい」

「……話しますよ。時間はかかるし、話せないことも、あると思うけど」

「ええよ。でな、せつちゃん」

「なに、このちゃん」

「せつちゃんは、うちと友達で、いてくれるん……?」

不安そうな声だった。二年近くも、再会してからまともに話してないし、目も合わせていないんだから……当たり前なんだと、思う。ごめんね、このちゃん。ずっと、不安にさせて。もう、大丈夫だから。

「もちろん。私は、今も昔も、この先も　　ずっと、このちゃんの友達です」

「　　せつちゃん!!」

二人して抱きしめあって、喜びの涙を流しながら。私たちはしばしの間、互いを離すことは無かった。

大丈夫、今度は絶対に、護ってみせるから。

呼び出された日

過去に戻ってから（もう過去に戻ったのだと考えることにしている。一応は）翌日にしてこのちゃんと再会して色々と話した結果、私たちは二人揃って、一限目の授業をサボってしまいました。

「サボりなんて初めてやから、なんや楽しいな〜」

「すみません、このちゃん。私のせいで……」

「気にしないでええよ。うち、今すごく嬉しいんやから。あ、それと」

このちゃんと手を繋いで教室へ向かうために廊下を歩きながら話していたら、立ち止まってこのちゃんが言った。

「敬語は嫌や言うたやろ。せっちゃんがうちの護衛というのは分かったけど」

「う……ごめん、このちゃん。気を付ける」

「うん」

私は、このちゃんに自分が護衛の立場であることを明かした。何から護るのかは、まだ言えない。魔法の存在については、長の意向もあつて教えるわけにはいかない……私としては、教えてしまいたいだけけれど。そうすれば、仮契約だって防げるから。

「でも、お父様も心配性やね。大丈夫やいうのに」

「……危険は、いつどこに潜んでいるか分からないよ、このちゃん。もしどこか探検したりするときは、私に言ってね？」

「オーケーや。あ、ならせっちゃんも図書館探検部に入ろうや。楽

しいえ〜」

「……入るのは、遠慮しておこうかな」

「え〜、なんでや?」

「部活はちよつと。でも、探検の時は付き合いたいんだけど……い
いかな?」

「もちろん、大歓迎や!」

よかった、そう笑うと、このちゃんが不思議そうな顔をして私を見
つめてきた。何か、拙いことを言っただろうか。

「んー、せつちゃん、話し方変えたん?」

「え?」

「ずーっと標準語やし……それに……」

「それに?」

「なんて言うんやろ。落ち着いてる言うか……大人っぽい?」

「ああ……」

まあ、中身はプラス数十だから……言えないけど。

「練習してたら、これに慣れちゃって。大人っぽいかは分からない
けど……変、かな?」

「ううん、全然。せつちゃんはせつちゃんやしな」

「……うん」

そう笑ってくれるこのちゃんが、とても嬉しい。何だかまた泣いて
しまいそうで、私は随分と涙腺が脆くなってしまったようだ。

「さて、と。それじゃせつちゃん、いくえ?」

「いつでもいいよ」

教室の扉を前に、二人で顔を見合わせる。休憩時間とはいえ、朝に教室を飛び出してから丸々一時間は行方不明だったわけで……このクラスが騒がないはずが、無い。

二人で覚悟を決めたところで、このちゃんが教室の扉を開ける。少しでも被害を少なくするために、後ろの扉を、それも静かに開けてこのちゃんがこそそそと侵入を試みようとしたところで

「このちゃん、ちょっと待ってて」

「ふえ？」

言うが早いかこのちゃんを追い越して教室の中へ。どう細工したのか頭上から落ちてきた金ダライを誰もいない方向へ弾き、足元の糸は気を通して踏み抜く。左右から飛んできた矢は僅かに上体を反らして躲し、何故か極めつけに目を輝かせて襲って来たクーフェイと長瀬は、二人の間を擦り抜ける際に足をかけてさようなら。

サツと周りを見てばかんとしたクラスメイトを確認。畏の類はもう無さそうなので、教室の外で待機してもらったこのちゃんを振り向いた。

「もういいよ、このちゃん」

「ふわぁ……せっちゃん、凄いなぁ。うち吃驚したわ」

「私も驚いた」

特に最後のクーフェイと長瀬に。あれは絶対にあの二人の独断だろう、このちゃん相手にもやったなら一発殴るところだ。

「え、えーと……？」

「桜咲、さん？」

「はい？」

戸惑い気味に呼ばれて、とりあえず振り返る。どういうわけか、やけに注目されている。真名と目が合つと、声も無く諦めると言われた。何を、諦めると？
すこぶる拙い状況なのは分かつて、私は一歩、その場から後ずさりする。

「せつちゃん？」

「このちゃん、私は今日はこのまま帰ろうかなと思う」

「え、なんでや？」

「……クラスメイトの視線が、怖い」

「んー……なあ、せつちゃん」

「うん？」

「諦めや」

「……………え？」

このちゃんまで、何を　　！？

次の瞬間、何故か押し寄せてきた人の波。え、待って、意味が分からない。

というかどうしてそんなにキラキラした目でこっちを見てくるのか教えてください。

「すごいすごい、ねえさっきの何！？」

「木乃香とどこに行ったの？」

「ってか二人はどういう関係！？」

「二人ともなんか目が赤いけど、もしかしてもしかしちゃったの！？」

「運動神経が良いだけですこのちゃんとはちよつと用事があったでこのちゃんは普通の友達でもしかしちゃってません！！このちゃん助けて！！」

「あはは、せつちゃん頑張れ〜」

人波の向こうで手を振るこのちゃん。なんでこのちゃんは無傷なんですか!?

「つとと、さーて桜咲さん。色々取材させてもらおうか?」

「はっ?」

「桜咲さん、いつも教室でも一人だしあんま話してくれないから、こっちとしてはどういう心境の変化があったのか知りたいんだけどね〜?」

「つ……」

そうか、それが原因か。つまり今までの私から考えられない行動をしたせいで、こつも注目を浴びるはめになったと。心底、後悔する。もう少し考えて行動すればよかった。といよりも、たったそれだけで騒ぎすぎだろ。こんなに騒がしいクラスだったっけ……だったな。

「で、桜咲さん、答えは?」

「黙秘権を行使しますっ」

「いやいや、それは駄目だっつて」

「駄目も何もありません。私から提供できる情報はこのちゃんとは友人関係であることだけです!」

「ほほう。木乃香と友達ねえ……木乃香、桜咲さんとはどういう関係なわけ!?!」

「んー、せやなあ」

タツとこのちゃんが人を掻き分けて私の隣までやって来る。えーつと……このちゃん?

「せつちゃんは、うちの大事な人や」

「おおおおお!!!!」

「このちゃん!?!」

なんでそんな曖昧な表現を!?!はっ

!!

「えへっ」

目が合ったこのちゃんが、にっこりと笑う。これは楽しんでいる表情だ……昔も変わらず、このちゃんは人が困るのを　とりわけ、私が困るのを楽しんでいる節があったが、何も今じゃなくともいいのに。

「桜咲さん、どういうこと!?!」

「だから、違います　!?!」

次の授業の先生が来るまで、私はこのちゃんとクラスメイトの方たちに振り回されることになるのだった。

放課後。私はこのちゃんと一緒に、買い物に来ていた。

「せつちゃん、見てみーこれ」

「あ、可愛い。猫かな?」

「犬もあるな」

女の子向けの雑貨屋に入って、このちゃんは終始ご機嫌にしながら歩き回っている。一方の私も、見慣れない物にちよつと楽しんでたりする。

こういふお店は、あまり入らなかったからなあ。このちゃんと仲良

くなつた後に、たまに出かけることはあつたけど……どうにも、場
違いな気がして、居づらさを感じていたから。
今は、そんな気持ちも感じないんだけど。

「せっちゃん、次はあっち行こう！」

「うん」

そうして歩き回って、日が沈み始めたころ。私とこのちゃんは寮に
帰った。

寮の廊下でこのちゃんと別れて、部屋へ戻ろうと歩き出したところ
で、声をかけられた。

「桜咲さん」

「はい？」

振り返って立っていたのは、茶々丸さん。絡繰さんと、呼んだ方が
いいんだろうか。

「これを」

「……手紙？」

「はい」

差し出されたのは、一通の封筒。受け取って後ろを見ると、案の定
そこに書かれていたのは『エヴァンジェリン』の文字。

エヴァンジェリンさんが、私に手紙か。あまりいい予感がしない。

「それでは」

「あ、はい。ありがとうございます」

一礼して去っていく茶々丸さんを見送って、今度こそ私は部屋へと

戻った。

「さて」

問題となる手紙の封を切り、中身を取り出す。入っていたのは一枚のカードだった。

「今夜十時に、桜通りに、か」

そういえば、エヴァさんとネギ先生が関わる最初の事件というのが、桜通りの吸血鬼だったはずだけど……詳しい話は、聞いていないから知らないんだよな。まあ、呼び出されているのは確かだし

「行くしかない、か」

手首の勾玉を撫でて、私はそっと手紙を机の引き出しに仕舞った。

密かな対決の日

夜、九時五十五分。待ち合わせの五分前きっかりに桜通りについた私は、その場で立ち止まり考えていた。ちなみに服はジャージ上下。何事も無く終わったならランニングして帰ろうかと思ったのだ。

「終わらなければ、どうするのがいいんだろうな……」

何事があった場合、私はどうするのが一番いいだろう。なまじ未来を知っている分、過去に無い出来事が起こると弱いみたいだ。私は、エヴァンジェリンさんに呼び出されたことなど、無かったのだから。

それを言うと、教室でいきなりクーフェイや長瀬に襲われたことも、無かったのだが。

「来たか、桜咲刹那」

「こんばんは、エヴァンジェリンさん」

街灯の上に立つエヴァンジェリンさんを見上げる。すたつと地面に降りてきてくれて助かった、見上げたまま話すのは、正直つらいものがあるから。

「絡繰さんから手紙を受け取りましたが、いったい何の用ですか？」

「なに、お前に興味があつてな」

「興味……？すみませんが……」

エヴァンジェリンさんは同性愛者だったのだろうか？否定はしないが、さすがに困ってしまった。

「私に、その趣味はありません」

「阿呆か！私にもない！！」

「そうですか、それならいいんです」

本気で安堵。知らないだけでその趣味がある可能性も否定できないだけに、余計に不安になってしまった。

「まったく　で、お前、いったい何があった？」

「またその質問ですか……」

今日一日で、クーフエイや長瀬にも言われているし。ああ、あの二人といっ手合わせをしよう。近いうちにしておかないと、また教室で襲われ

「おい、聞いているのか」

「……聞いてます。何があったか、ですけど……正直、お答えできません」

「ほっ」

「言っただけでももらえるのかわかりませんが、あまりたくさんの人に話すようなことでもありませんから」

「ということは、知っている奴が少なくとも一人はいるわけだな？」

「……まあ、そうですね。その人も、全部を知っているわけでは無いんですけど」

真名に話したのは、とても大まかな表面上の事だけ。私が未来を知っているのは知っているが、その未来がどんなものかを、あいつは殆ど知らない。

「それが分かれば、お前が腑抜けになつた理由も分かるのか？」

「……腑抜け？」

「そうだ。昨日までのお前と、今日のお前。力は増したようだが
実につまらない」

「つまらない、ですか。ちなみに、エヴァンジェリンさんから見ると、私はどう変わったんですか？」

「気になるか？」

「多少は」

真名たちはみんな、感覚で私が変わったのを感じているだけで言葉にはしてくれないし……このちゃんは、大人っぽいと言っていたけど、まあ、それは仕方ない変化だとも思うけど。これで子どもっぽいと言われた方が、正直複雑だ。

「そうだな、まあお前にとって分かりやすい例えをするなら

刀だな」

「刀……」

「昨日までのお前が、触れる物全てを斬る抜身の刀だったのに対し、今日のお前は鞘に仕舞った上に、それに布を巻きつけているような感じか。触れる物を絶対に傷つけないようにしている」

「……そこまでですか？」

「じゃなければ、クラスの連中の馬鹿騒ぎを、ああも容認してやるか？」

「あ……」

なるほど、確かに昨日までの私なら無視を決め込んでいるな。そう考えると、エヴァンジェリンさんの例えにも納得がいく。誰も傷つけないように、か。

「無関係な人を傷つけるわけには、いかないですし？」

「だとしても、たった一晩で随分な変化だ。私が知りたいのは、何

がお前をそこまで変化させたのかだよ」

「そう言われても、私は何も言えませんよ。それに、私はつまらないんじゃないかったですか？」

「ああ、つまらん。つまらんから、聞き出すついでに壊してしまおうと思っただけだ。――！」

「ッ！」

言うが早いのか、投げられたフラスコから氷が襲いかかってくる。これは、エヴァンジェリンさんの魔法……？

その場から飛び退き、回避。地面が凍りついているが、腑に落ちない。同じ氷の魔法でも、彼女の魔法はもっと強力だったはずなのに。

「エヴァンジェリンさん」

「なんだ？」

「力が、制御されているんですか？」

「っなぜ知っている!？」

やはり、か。登校地獄の呪いとは別の、学園結界が原因なのだろう。ということは、先ほどのフラスコに入っていた液体が魔法の触媒で、それがなければ戦えないということだ。

単純に考えるなら、触媒を消費させてしまうのが一番いいかもしれない。触媒が無くなれば、魔法を使えなくなるわけだし。

「まあ、そももいかないんでしょうけど」

背後から急接近してくる気配。突き出された右拳を半身捻って避け、逆にその腕を掴んで投げ飛ばす。

エヴァンジェリンさんの横に着地した茶々丸さん。二対一、か。

「卑怯、と言ったら、どうしますか？」

「魔法使いの戦闘に従者はつきものだからな。まさか、それすら忘れて腑抜けになっただか？」

「いえ、言ってみただけですよ」

厄介、ではあるが………どうにかするしかないのも、また事実。

右手の勾玉に気を籠める。元の姿に戻った夕凧を握りしめ、左手を添えた。

「む………武器を持っていたか。何も持っていないから、どうしたかと思っていたが……」

「持ち運びを楽にしたんです。この方が便利ですから」

「なるほど。いつの間になんな芸当ができるようになった？」

「………いつでしょうね」

惚ける。いつかと言われたら、未来だと答えるしかないから。ピクリとエヴァンジェリンさんの唇が引き彎った。どうやら、気分を害してしまったようだ。

「全く、お前は随分と憎たらしい性格になったな。まさか、それがお前の本性か？」

「まさか。私の根本は、何も変わっていませんよ」

「ならば、なんだと言っ？」

「………教えません」

斬りかかる。前に出た茶々丸さんに対し、躊躇いも容赦も無く刀を振り上げ、振り下ろす。躲されたそれが制服を掠り、ボディを露わにするのを確認する前に、頭上から降り注ぐ魔法の嵐に舌打ち。

「神鳴流、斬空閃!!!」

頭上へと気を飛ばして相殺する。茶々丸さんが身を屈めて接近してきて、左腕を突き出すのを、自分で後方に飛ぶことで威力を弱める。受け身を取って立ち上がり

「斬岩剣!!」

地面に向かって技を放ち、コンクリートを粉碎する。細かな石粒となったコンクリートは技の威力に押されて、迫って来ていた茶々丸さんに襲いかかる。

「これは」

「捕縛結界、五角楼」

一瞬の隙を生んだ茶々丸さんの背後に回り込み、捕縛する。対象にお札を貼り付け動きを封じ、またその周りを五つの見えない壁で囲い外から遮断する捕縛用の結界。これで少しは、時間を稼げるだろう。

「ほう、東洋の結界か。さすがにそれは解除に時間が必要かな?」

「はい、マスター。申し訳ありません」

背後から聞こえた声にその場を飛び退く。可笑しそうに愉快そうに笑うエヴァンジェリンさんがいた。

「だが、何故だ?最初のお前の一撃は、茶々丸を壊すつもりのようにだったか」

「クラスメイトですから、腕を斬ってしまうのはどうかと思いましたが。それに、そうしたらエヴァンジェリンさん、怒るんじゃないかもしれませんか?」

「なんだ、私を怒らせたくないのか?」

「ええ」

力を制御されているとはいえ、エヴァンジェリンさんの相手は出来るなら避けたい。彼女がそれを良しとしてくれるとは思えないけれど。

「どうしたら、見逃してくれますか？」

「お前の身に変化を齎した原因が分かれば、とりあえずは考えてやらんでもない」

「原因を聞いても何だかんだで襲ってきそつな言い方ですね…」

「ふっ、どうかな」

ああ、そうだ。思いついたようにエヴァンジェリンさんが笑う。

「お前のやる気を出させてやるうか」

「……何をやる気ですか？」

「今、ここで私を倒せなければ　近衛木乃香の血を貰う」

「……」

エヴァンジェリンさんの言葉は、私の予想した通りだった。過去の私なら激昂して斬りかかるところだろう。予想していたとはいえ、実際に言われると私もブチリと切れるものがあった。

「どうした。お前のその鞘に仕舞って布にくるんだ刀で斬れるなら、存分に来るがいい。近衛を守りたいならな」

「ええ、そうさせてもらいます」

ただし

「刀は鞘から抜きますけれどね」

怒りではなく、理性で、冷静に、布を払って鞘から引き抜く。あくまで静かに、怒りで湧き上がる力は理性で制御して、私は刀を振るおう。

「神鳴流 斬鉄閃」

放つ、同時に走り避けたエヴァンジェリンさんの前に躍り出て、右手に握った刀を振り抜く。

「はっ、隙だらけだよ」

「どうでしょうね」

左手を突き出し、身を躲したエヴァンジェリンさんからいったん距離を置くために飛び退く。

「なんだ……?」

驚いた表情のエヴァンジェリンさん。彼女の頬からは血が流れている。そこを狙った左手は、確かに回避された。したと、彼女は思った。

「なるほど、気を使っているのか」

「あたりです」

斬魔掌、弐の太刀。手の先に気を集めて剣として、相手を斬る技。青山宗家ゆかりの方にしか伝承されない弐の太刀だが、私はそれを教わる機会に恵まれた。

「二刀流というわけか、面白い」

「私は、つまらないんじゃないですか？」

「ああ、撤回しよう。お前は昨日までのお前より　面白くなった
！！」

頭上と、何時の間に仕掛けたのか私の周りに転がされたフラスコから、魔法が放たれる。

「氷爆」

「っ斬空閃！！」

咄嗟に、頭上へと気を放ち相殺する。撃ち漏らしはあるが多少のダメージは覚悟の上で、その場から飛び退き回避しようとして、飛んだ矢先で背後に現れたエヴァンジェリンさんに捕まった。

「凍れ」

「ッあああああ！？」

至近距離で放たれた魔法に、私は無様に地面に落とされる。

「ぐっ、うっ……」

叩き付けられた痛みに呻き、腕に力を籠めて起き上がろうとして、失敗した。右腕と左腕の一部が凍りついている。頬や体の一部が他にも冷たいことから、おそらくそこも凍っているんだろう。

体の自由が利かず、視線を巡らせてエヴァンジェリンさんを探して、彼女は目の前に降りてきた。

「この程度か。まあ、なかなか楽しませてもらったよ」

「こっちは、楽しくないですけど……」

出来るならこのまま終わりにしたいのだが、そうもいかない。私はまだ、彼女を倒せていないから。

「まだ立ち上がれるか？」

「ええ、まあ……貴方を倒さないと、いけないですから」

「近衛の為か？」

不意に、不機嫌そうに彼女の眉間に皺が寄って、見下ろされる。冷え切る体に浅く呼吸を繰り返しながら、私はそんな彼女の変化に僅かに首を傾げた。

「どうして、あの女の為にそうまで頑張れる」

「それは……」

「昨日までのお前もしかり、今日のお前も、表面上は変化しようとも結局は同じだ。何を思って、そうまでする」

「……エヴァンジェリンさんには、無いんですか？」

「なに？」

「護りたいもの」

背中に意識を集中させる。大丈夫、私はやれる。まだまだ、やれる。

「護りたいもの、だと？」

「ええ」

「はっ、悪の魔法使いが何かを護る、だと？有り得んな」

「そうでしょうか。私には、貴方の護りたいものが、少なくとも一つは分かりましたけど」

「……なんだと？」

「茶々丸さん、傷つけたら、怒りますよね？」

大切だから、傷つけられたら怒る。それがたとえ物でも、人でも。家族でも、友人でも。大切だから、護りたいと思う。

「私は、このちゃんを護りたいんです」

だから飛ぼう。護る為に翼を広げて、今度こそ。

「もう二度と、傷つけたくないから」

翼を広げる。気が溢れて、パキパキと体に張り付いた氷を剥がしていく。

そうして私は、高く高く、飛び上がる。

「護ると、決めたんです」

そのためなら、誰よりも高く飛んでみせる。今度こそ。

分かり合えた日

空で、エヴァンジェリンさんと相對する。右手には夕風、左手にはまだ気は集めず、夕風に添えて。

くだらない、そう彼女は馬鹿にしたように鼻で笑った。

「近衛木乃香を護りたい、か」

「ええ。そのためなら、私はいくらでも立ち上がれます」

「本当に、それほどの価値があの子にあるのか？」

「……怒りますよ？」

このちゃんを侮辱するのは、許さない。

「まあ、待て。確かにあいつは、桁違いの魔力を持っているようだが……所詮は何も知らない、ただのガキだ」

「真祖の貴方からすれば、私もただのガキでしょうに」

「違うな。お前は少なくとも、覚悟を持っているよ」

彼女にとっての違いは、そこなんだろうか。分からないけれど、たぶん褒め言葉と受け取っていいんだよ、な？

「魔力を持っていようと、それを知らなければただのガキ……いや、魔法使いどもからすれば、いい餌だな」

「激しく同意しますね。私の役目は、そんな輩からこのちゃんを護ることでもありますから」

「無駄なことだな。近衛が何も知らないうちは、いくらでもそいつらは沸いてくる」

「全部斬り捨てるまでですよ」

それだけでこのちゃんを護れるなら、むしろ安いくらいだ。強くなればいい話なんだから。

「……やはり分からんな。そうまでして近衛を護ってどうするといふのだ？」

「言っている意味が、よく分かりませんが」

「いくら護ろうと、お前は受け入れてもらえないということだよ」

自然な動作で、エヴァンジェリンさんがフラスコを投げ氷の矢が放たれる。上空へと回避して、彼女の頭上で刀を構えた。

「斬鉄閃！！」

ひらりと躲される。それは承知の上、急下降してエヴァンジェリンさんに接近し、至近距離で放った。

「斬岩剣！！」

「甘い！」

ギシツと妙な音と感覚。エヴァンジェリンさんを前に、刀がそれ以上進まない。視線を巡らせれば、彼女の指先から細い糸が放たれ、私の体に巻きついていった。

「人形使い……忘れてました」

「忘れるな、阿呆が。さて、私の方もそろそろ触媒が切れるんでな、やり易い方法を取らせてもらおうか」

「ッ……」

覗き込まれた目に、吸い込まれる。そうして次に気づいたとき、随

分と懐かしい場所にいた。

「これは……」

「幻想空間だ。ここでは私の力も制御されず使えるからな、さっきまでのお遊びとは違うぞ」

「……………それは、私にも言える事ですよ？」

「なに？」

足に気を籠めて一気に距離を詰めて、エヴァンジェリンさんの懐に入り込み、刀を振るう。右下から振り上げてそれを避けられたなら、次は左手で彼女の脇腹を突く。彼女の右手に集まる魔力が爆発し、それを気に同時に飛び退いた。

気を集めていてよかった。でなければ、左手が吹っ飛んでいたんじゃないかと思う。

「ずいぶんと無茶をするな」

「これくらいは、まだいけますよ。幻想空間は、実体には影響しませんから……………死なない限り」

「確かにそうだ。だが、もし腕がなくなれば……………」

「動かなくなるかも、ですね」

もちろんそれは困るので、気を付けるけれど。

「神鳴流決戦奥義」

それにあまりお喋りをしている余裕も無い。明日だって普通に学校があるし、わざわざ互いに傷つけあうことをしようとは思っていないから。

夕凧を構え、意識を集中させる。彼女には悪いけれど、一気に決めさせてもらおう。

「真・雷光剣!!」

「エクスキューションソード!!」

不思議なことに、ぶつかり合った技は学園祭と同じ技。激しい光と力のぶつかり合いで、ガラガラと建物が崩れていく音を聞きながら、夕風を握った右手の力を弱めることは絶対にしない。

「ははっ、予想以上だよ、刹那!!」

「そうですかっ…!!」

こっちは結構いっぱいっばいですよ。

「その力で、お前は近衛を護るのか？」

「ええ!!」

「受け入れられないとしてもか!？」

「っ……」

押してくる力が強くなる。これは、エヴァンジェリンさんの叫びなんだろうか。彼女の抱える何かの、重みなんだろうか。

「人外である私とお前が、本当に受け入れてもらえるとと思っているのか」

「っええ!!」

「友達だからとも言つつもりか? 今日のお前はなぜ、あんなにも笑っていられた?」

「笑ったら、いけないんですか?」

「さあ、どうだろうな。ただな、仮初の幸せに溺れる姿は、見ていられん」

「ッ……」

「仮初が崩れた時の絶望を味わうのは、お前にはまだ早い。だから、私が壊してやるう」

この戦いは、彼女なりの優しさなのだろう。私なんかの数十倍の年月を生き抜いてきた彼女には、今日の私が束の間の幸福に酔っているように見えただろう。

烏族のハーフでありながら、表面だけは人間のふりをして、その幸せを得て。その事実を受け入れられず拒絶されたとき、私がどれほど絶望するのは、想像したくも無いことだ。

この葛藤は、このちゃんにも分らない。人は自分に無いものを真の意味で理解することなど出来ないから。でも、それでも私は

「信じているんです!!」

「つなにを...!？」

「今日の幸せが、嘘じゃないと!私は、このちゃんを信じているんです!!」

「……信じたところで、裏切られるだけだとは思わないのか？」

「思いません。だって、このちゃんは」

『せーっちゃん』

『はい、なんですか?お嬢様』

『むう、またお嬢様言ったな。嫌や言ったやんか』

『あはは...ごめんなさい、このちゃん』

『うん!んで、あんな』

『はい』

『うちらずーっと、親友でいような』

『もちろん』

「私の、親友ですから」

ずっとなんとなく、そう信じている。

光が弾けて、音が遠のく。土煙の向こうで、倒れた影を見つけて

私の意識もまた、消えて行った。

「(いい匂い……)」

そう思つて、目が覚めた。窓から差し込む太陽の光に目を細めて、体を起こす。二段ベッドではないふかふかのベッド。ここは、どこだ？

「おはようございます、桜咲さん」

「あ、茶々丸さん……」

「……？」

ガチャリと扉が開いて入ってきた茶々丸さんに、思わず慣れ親しんだ名前の方を呼んでしまったのに気付く。不思議そうに首を傾げた彼女に笑つて誤魔化して、ベッドから降りた。

「ここは、エヴァンジェリンさんのお家ですか？」

「はい。昨夜の戦闘後、桜咲さんは倒れたまま起きませんでしたので、マスターが連れて帰るようにと」

「そうですか……ありがとうございます」

「いえ。リビングでマスターがお待ちです。どうぞ」

案内されるまま着いていくと、大仰にソファーに座ってお茶を飲むエヴァンジェリンさんがいた。

「起きたか」

「おはようございます、エヴァンジェリンさん。とりあえず、ご迷惑おかけしました」

「仕掛けられたのはお前だと言うのに、変なことを言う奴だ。まあいい、座れ」

促されて、彼女の向かいの席に座る。すぐに茶々丸さんがお茶を出してくれて、どうも、と小さく会釈した。

茶々丸さんがエヴァンジェリンさんの後ろに控える。さて、と口を開いたエヴァンジェリンさんに、私は身を固くした。

「昨日の勝負だが、覚えているか？」

「それが……幻想世界で戦ったのは覚えているんですが、その後は全く。結局、勝敗はどうなったんですか？」

「幻想世界だけ見るなら、私の負けだ」

そうやけにあっさりと、彼女は負けを認めた。といっても、私も彼女が倒れた後に気を失っているから、本当の意味で勝てたとは言いがたい気がする。

いくらエヴァンジェリンさん相手とはいえ、あれだけで気絶してしまうとは……弱く、なったのかなあ。

「情けない……」

「ん、どうした？」

「いえ。それで、幻想世界だけというのは、どういうことですか？」

「……お前は、そのまま実体でも気を失っていたんだよ。それに対

して私は意識もあつたし、茶々丸もいたからな。お前を殺すことが出来た」

「それじゃあ……私の、負けてことですか」

「そうなるな」

ふむ、そうするとどうしようかな。今この場で彼女に斬りかかってもう一度戦おうか。卑怯だとは思いつけれど、彼女を倒さないといけないが襲われてしまうし。

「物騒なことを考えるなよ？別に、近衛を襲つたりはせん」

「あ、そうですね」

「……分かりやすいくらいに殺気が収まったな。わざとか？」

「半分は」

深く深く、呆れたように溜息を吐かれる。

「まあいい。それより、負けたんだからお前の身に何があったのか話せ」

「そんな約束は、してないじゃないですか」

「近衛を襲わないと言っているんだ。代わりの代償だよ」

「……」

理不尽だなあ、相変わらず。まあ……信じてもらえるかも分からない話で、このちゃんの安全を得られるならそれでいいのかな。

「大まかな部分だけでいいですか？」

「それで分かるなら構わん」

「では……私は、今から数十年分先の未来の記憶を持っています」

そんな出だしで、真名より詳しく、けれど詳細 事件や、出来

事はあまり触れず、ただ漠然と、そして私にとって一番重要な部分の、このちゃんが死んだ事実について話した。これで納得してもらえなかったなら、諦めてもらうしかない。私はこれ以上のことを話すつもりは無いから。

「……なるほど、それでか」

「何がですか？」

「一晩で人が変わるには十分な事だな。それに、貴様が気絶した理由も分かった」

「…気絶した、理由？」

それは、どうということなんだろう。

「お前の話から考えるなら、今のお前は中学二年生の桜咲刹那の体に入った、数十年後の桜咲刹那ということになる」

「そう、ですね。はい」

「つまりお前の体と精神には、数十年分の経験の差がある」

「……………はい？」

「おかしいと思ったんだ。あれだけ実力があれば、もっと余力がありそうなものなのに、呆気なく倒れるからな」

エヴァンジェリンさんの話は、つまりこういうことだった。

私の中身は、記憶とそれに伴う経験を持つが、私の体にはそれが無い。

記憶から習得していた式の太刀を使うことが出来たが、体にとってはぶっつけ本番。それも出来る精神に出来ない体が無理矢理引きずられる形となってしまう、体にすぐに限界が来た。

要は足の遅い体が足の速い精神を追いかけて走った結果、ペースを保てず置いてきぼりを食らったと。

「……………修行のやり直しか、あ……」

「まあ、実際の経験が中身にある分、成長も速いだろう。死ぬ気で頑張ることだな」

「そうします……」

でも、それならば早くは気を付けないといけないな。忒の太刀なんて使ったら、またすぐに倒れそうだし……………。

「で、だ。刹那。お前はこれからどうするつもりでいたんだ？」

「このちゃんを護りますよ」

「それはもう聞いている。お前は、近衛にすべてを話すのか？」

「……………魔法については、長の意向がありますから」

「貴様の存在についてはどうする？信じているんだろう？」

私を試すように、エヴァンジェリンさんが問いかける。私の存在、ハーフであることを、このちゃんはまだ知らない。

「翼については、まだ言いませんよ。魔法にも近いことですし……………」

「所詮は言い訳だな。どれほど綺麗ごとを並べたところで、結局は拒絶されるのが恐いんだろう？」

「……………このちゃんは、大丈夫ですよ」

ちよつとだけ、嘘が混ざる。それを敏感に感じ取ったエヴァンジェリンさんの瞳が、剣呑に煌めいた。

こういう事は、似た境遇だけに、誤魔化せそうにないかなあ。

「……………認めてくれるって、信じてます。そりゃ、ちよつとは怖いですけど……………そう思うのも、仕方ないんじゃないですか？」

過去に一度でも迫害を、拒絶を受けたなら、それはいつまでも消え

ない。根強く、根深く、心に突き刺さってその事実を忘れさせないなら、私はそれに恐怖したままでいるしかないのか？そうやって自分を偽って、それこそ仮初の幸せを喜ぶしかないのか？

昔の私ならそれも仕方ないと諦めただろう。卑屈になって、自分の存在を卑下して。でも、そうすると、このちゃんが怒ったから。だから私は、違つと叫ぼう。

「その恐怖を飲み込んで、踏み出さないと……先へは、進めませんから。私は、このちゃんを信じると決めたんです。だって、友達ですから」

「友達、ね……仲良しこよしがいつまで続くかな」

「友達でいる限り、何時までも続きますよ」

「ふうん……」

認めようとしてくれないエヴァンジェリンさんに、困る。だって目の前の彼女が、まるで拗ねている子どもに見えてくるから。

私の数十倍は生きてるのになあ。やっぱり、見た目が原因なんだろうか。

「あの、エヴァンジェリンさん……」

「なんだ」

「そんなに疑うんでしたら、その……私と、友達になってくれませんか？」

「はあっ？」

本気で驚くエヴァンジェリンさんに、私は顔が熱くなる。正直、改めてこういう事を言うのは初めてで、結構恥ずかしいものなんだと思う。このちゃんも明日菜さんも気づいたら友達だったり親友だったり師匠だったりで、私から行動を起こすことはしなかったしなあ。自分からこうして言い出せるようになった分、成長はしているんだ

な。うん。

「なぜ私が……」

「仲良くしてもらいたいですし……それに、エヴァンジェリンさんが、悪い人じゃないって、知ってますから」

「私は、悪の魔法使いだぞ？」

「知ってますよ。でも、私のことを心配してくれたりする、優しい人です」

「んなつ……！！」

あ、赤くなった。真っ向からこういう事を言われるのは、照れるみたいだ。私としては、そんな彼女を見られて嬉しいんだけど。

「それで、どうですか……？」

「……ふんつ。まあ、そうだな。お前の言う友達ごっこがどんなものか、付き合ってやらんでもない」

「そうですか」

つまりは、友達になってくれるということだ。私としては、十分に喜ばしいことだ。

「あの、ちゃちゃま……えっと、絡繰、さん」

「茶々丸で結構です。桜咲さん」

「あ、それじゃ私も刹那で……えっと、それですね。よかったら茶々丸さんも、友達になってくださると……嬉しい、んですが……」

きよとん、と茶々丸さんが驚いたように見えた。無表情であまり変化はしないけれど、それでもそんな風に見えたんだから、それでいい。

「構いませんが……」

「よかった。こづいづのもあれですけど……よろしく願いしますね」
「ふんっ……」

……にしても、エヴァンジェリンさんって、あれだろうか。あの……
ツンデレとかいうやつ。

「今、何か妙な事考えたか？」

「いいえ、何も」

恐いくらいに睨まれて、本気で焦る。エヴァンジェリンさんの前で、
下手なことは考えない様にしよう……。。

常識人に会った日

一晩、泊めてもらったことと、怪我の手当てをしてもらったお礼に朝食を用意したら、エヴァンジェリンさんにとても喜ばれた。

茶々丸さんも、栄養の摂取は出来ないものの味覚はあるようで、美味しいと言ってくれたので嬉しかった。二人とも、特にエヴァンジェリンさんは日本茶が好きなのよだし……今度、和菓子でも作ろうかな。喜んでくれるといいんだけど……。

「むむむっ、こ、これはどういうことだ!？」

「あ、せつちゃん」

そのまま二人と学校に行くことにした。制服は、茶々丸さんが持ってきてくれたただけだけど……いつの間に。私が寝ている間にだろうか？

とりあえず教室に入ると……どうしてだろう、また注目された。このちゃんが無心か安心した表情で駆け寄ってきたので、どうしたのかと思いつつも笑いかける。

「おはよう、このちゃん。どうかしたの？」

「んとなー、朝せつちゃんと一緒に学校行くこと思ったら、いないって真名ちゃんが言うてどうしたんかなあって思ってたんや」

「ああ、そっか。ごめんね、このちゃん」

「ええよー。あ、エヴァちゃん、おはようさん」

「……ああ」

ふいっと顔を背けて自分の席に座るエヴァンジェリンさんと、それを追う茶々丸さん。クラスに馴染むのはまだまだかかりそうだなあ。

「桜咲さん、これはいつたいどういうこと？何があったの？」
「へ…？」

マイクを片手に突撃してきた朝倉さんに、後ずさる。周りの人たちも気を抜いたら昨日のように雪崩になって襲ってきそうで怖い。とりあえず、朝倉さんの言っている意味が分からなくて、首を傾げて聞いた。

「何のことですか？」

「マクダウエルさんのことだよ。茶々丸さんも一緒に三人で登校つて、何があったのさ？」

「何が、つて言われても……」

話せるわけが無い。一晚戦った拳句、朝ご飯を一緒にしましたなんて。

「あ、うちも知りたい。な、せつちゃん。なして？」

「えっと、その……」

このちゃんにまで聞かれて、答えに詰まる。どうしよう、なんて言えばいいんだろう……誤魔化すか？

「今日は、ちょっと早めに出て……散歩しながら学校向かってたら、偶然、ばったり……」

「そうやったんかあ。ほな、せつちゃん。今度はうちも一緒に散歩する？」

「う、うん。いいよ、今度は一緒に行こうね」

「んー、それじゃただの偶然、かあ。一夜かけてあんなことやこんなことがあったりは」

「しません!!」

何を期待しているんだ、この人は!?

その日の放課後、手合わせを求める長瀬とクーフェイから逃げるように教室を飛び出して、私は寮への帰り道を歩いていた。

このちゃんは占い研究部に出ると言っていたので、一緒にはいない。ただ、お願いしてお守りを持ってもらっている。見た目は普通のお守りだが、中に入っているのはお札の一つで、このちゃんに危険が迫ったとき、私にそれを知らせてくれるものだ。これなら遠くにいなくてもこのちゃんの危険に駆けつけることが出来る……一番いいのは、やはり一緒にいることなだけけれど。

それはそうと、この後はどうしようかな。寮に帰って、せっかくだしエヴァンジェリンさんのところにお邪魔しようか。あれ、でもエヴァンジェリンさんって学園から監視されてたり……まあ、問題があるなら向こうから言うてくるか。友達に会いに行くだけなんだし……。んー、でもよく考えると、エヴァンジェリンさんは魔法使いなんだよなあ、西としてもそれはあまり良くない……いやでも、今の私は西の裏切り者扱いだし……うん、とりあえず、友達に会いについてことで誤魔化そう。友達なのは事実なんだし……うん。

深く考えすぎると動けなくなりそうだから、考えるのはやめておく。考えすぎて自分で抜けられなくなるのは昔からの悪い癖だしなあ。

「と、あれは……」

考えから抜け出したところで、見覚えのある後ろ姿を前方に見つける。千雨さんだ。

本でも読んでいるんだろうか、足元への注意がちょっと不足してる

……あ、つまずいた。見捨てることもできず、私は足に気を集め、
気に千雨さんの後ろに立ち、倒れかけた体を引き戻した。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ……ありがとうございます」

「どういたしまして」

お礼を言いつつ、どこから現れたんだ？とばかりに千雨さんが私を
見つめている。まあ、私との距離は結構あったから、気づいていな
くても可笑しくない。

にしても、そんなに不思議そうな顔をしなくても……ああ、そうか。
認識障害があるから誰も気にしていないけれど、突然、こんな風に
人がすぐ傍に現れるのは、普通の人からすればおかしいことなのか。
確か千雨さん、認識障害が効きづらい体質だったか。だから、こん
なに不思議そうにするんだろう。

「寮へ帰るんですか？」

「ああ」

「よかつたら、ご一緒してもいいですか……？」

「…別に、かまわねえよ」

本を閉じて鞆に仕舞う千雨さん。それから歩き出して、けれど特に
何か話すことも無く私たちは歩く。

「……なあ」

「はい？」

不意に、千雨さんが口を開いた。

「今朝、絡繰たちと一緒に学校来てただろ？」

「ええ、まあ」

「どう思った」

「……」

千雨さんの問いかけの意味。聞いた彼女はどこまでも無関心を装いながら、鞆を握る手を緊張に震わせて。

私はと言えば、彼女の問いに答えを出すこともせず、首を傾げた。

「長谷川さんは、どう思うんですか？」

「……」

問い返されるとは思わなかったのか、千雨さんはぴたりと足を止めてしまった。私もつられて立ち止まり、一分だけ先に進んでしまった体を振り向かせる。頼りなく彷徨う瞳を見上げた。

「聞きたいのは、茶々丸さんの性格ですか？それとも、茶々丸さんが、ロボットであることですか？」

「っ分かるのか!？」

千雨さんが知りたいのは、後者。誰もが茶々丸さんをクラスメイトとしか認識していない中で、彼女をロボットだと考えるのか、否か。

「……ロボットがクラスメイトなのは、おかしいですか？」

「普通に考えておかしいだろ？いや、絡繰だけじゃない、他の奴らもなんか変だろ。異様にガキみたいだったり、やけに運動神経が良すぎたり……極めつけは」

「子ども先生」

そうか、千雨さんはこういう事にも悩んでいたのか。

私たちの世界からすれば、子どもが力を持っていようと何ら不思議

ではない。子どもが大人を倒すのが普通に有り得る実力世界だから。けれど、彼女はそうではない。普通の、この麻帆良では通用しない外の常識を持った存在だ。彼女にとって、私たちの世界で起こりうることは、有り得ないの一言なのだろう。

「おかしいだろ。なんで誰も不思議に思わないんだよ。法律とか常識とか、いろいろあるだろ……」

私を話を通じる人間と捕えたのか、途端に千雨さんは弱弱しく言葉を紡ぎ出した。

「誰も何とも思っていない。変だろ。科学技術も、身体能力も、麻帆良の外と比べたら異常すぎる。あちこちで普通に乱闘だつてあるし、みんなそれを危ないとも思わないで観戦するし……意味がわかんねえよ。なんなんだよ、私がおかしいのか？私だけが、変なのか？」

「おかしく、ないですよ」

千雨さんは、おかしくありません。そう言うと、彼女の表情が途端に泣きそうに歪んでしまった。どうしよう、さすがにこの場で泣かれるのは困るなあ。

「しょうがない……長谷川さん、ちょっと失礼しますね」

「は？……おわっ」

よいしょ、と千雨さんの後ろに回って横抱きにする。身長差はあるけれど、まあこれくらいなら平気だ。

「で、長谷川さん。ちょっときついかもしれないですけど」

「あ……？」

「貴方の言う『異常』を、体験してみてください」

言って、私は気を集めた足で思い切り地面を蹴った。それは明らかに、彼女の言う異常な速さだった。

とりあえず、千雨さんは私と真名の部屋に招待した。真名はまだいないので好都合。

ぐったりとしていた彼女を座らせて、私といえば、お茶を淹れいる最中。ちなみに日本茶。お茶菓子は饅頭。

「どうぞ。落ち着きました？」

「あー……あんまり」

「そうですか」

お茶を飲んで一息吐く。少しの沈黙を挟んでから、私は笑った。

「で、どうでした？異常体験は」

「普通にありえねえよ……」

「まあ、麻帆良は私みたいなことが出来る人がそこらじゅうにいて、しかもそれが容認されているということですよ。裏事情もいろいろありますけど……それは、聞かない方が身の為かと思えますから」

「危ないこと、なのか？」

「生死を賭けるくらいには」

「……」

そういう世界だから、むやみやたらに人を巻き込めない。けれど、放っておいたら千雨さんはまた長い時間を一人で悩み続けることになるし、そう思うと見捨てられなくて。

力になれるなら、なってあげたいと思ってしまった。

「……愚痴があったら、いつでも話に来てください。話を聞くくらいは、できますから」

「いいのか？」

「長谷川さんが、私みたいな異常でもいいと、言ってくれるなら」

「……あー、その……悪かったな」

「構いませんよ。普通と違うのは自覚してますし……それに、それを誇りにも思ってますから」

「誇り？」

「人と違うけど、そうだからこそ出来ることもあるんです」

誰かを護ったり、とかね。

「ああ、それから」

不意に思い立って、机の引き出しからお札を一枚取り出す。このちやんにあげた物の予備で、効果は同じだ。

それを小さく折りたたんで、お守り袋に入れてから、千雨さんに渡す。

「どうぞ」

「んだよ、これ」

「危険が迫ったら、私にそちらの場所が分かるようになってるんです」

「……どういう仕組みか、聞いてもいいのか？」

「聞かない方が良いですね。ただ、そういうものだけ思ってくれれば」

「……もし、本当に私に危険が迫ったとして、お前はどつするっ
ていうんだよ」

「やるだけのことをします」

私に、やるだけの力で、護る。このちゃん以外まで護るつもりなのかと言われれば、そうだと言っしかない。本当にそんなことが出来るのかと言われれば、出来ると言っしかない。

だって、見てしまったら。触れてしまったら。私は、その人までも護りたいと思っってしまったから。

「……桜咲って、見かけによらずお人よしなんだな」

「あはは……本当に、自分でもそう思います」

せめて私の手の届く分だけは、護りたいなと。

図書館島初探検の日

「図書館島？」

『そうなんや〜』

テストまで残り数日、エヴァンジェリンさんの自宅にお邪魔していた私の元に、このちゃんから電話がかかってきた。

なんでも、図書館島にある魔法の本を探しに行くとかなんとか……そういえば、この期間にこのちゃんが行方不明になって、探し回ったような……まさか、これが原因か？

「このちゃんも行くの……？」

『うん。パルとのどかは地上で連絡係やけどな。せつちゃん、この前、探検に一緒に行く言うてたし、どうかな思って』

「……私も行く。待ち合わせは？」

『七時に図書館島入口や。必要な物はうちが持ってくるから、手ぶらでええよ〜』

「うん。それじゃ、絶対に先に行かないでね」

『了解や〜』

さて、図書館島ね……あそこ、色々と仕掛けがあるって聞いてたけど、魔法関係の仕掛けとは違うのかな……？

「近衛木乃香か？」

「ええ。図書館島に、魔法の本を探しに行くそうですよ」

「魔法の本ねえ……」

くつくつと喉を鳴らしてエヴァンジェリンさんが笑う。

「本当にあるんでしょうか？」
「まあ、あったとすれば十中八九、あの爺の仕業だな」
「……学園長、ですか」
「知らず知らずに魔法に関わらせていくつもりだろうな。でなければ、あんなクラス構成は有り得んよ」
「それは、まあ……そうでしょうね」

昔は、私も何も不思議に思わなかったけれど。こうしてみると、ネギ先生の為に用意したと言ってもいいクラスだ。
エヴァンジェリンさんも私の話を聞いて改めて調べてみたようだけど、揃いも揃って潜在魔力や身体能力がおかしいそうだ。優秀な従者になれると言っていた。

……このちゃんも私も、まんまと利用されたってことなんだろう。

「さて、お前が行くなら、私は桜通りにでも顔を出すとするか」
「テスト前ですし、程々にしてあげてくださいよ。勉強もしないといけないでしょうから」

「分かっているさ。お前のせいで溜めていた魔力も消費してしまっ
たしな、暫くはばれない様にまた集めなおしだ」

「……私のせいじゃないですよ」

喧嘩を売ってきたのはそつちだ。

図書館島の入口までやって来ると、このちゃんが手を振っていた。

「せつちゃん」

「このちゃん。他のみんなは？」

「先に侵入口に行ってるえ」

「（……………侵入口？）」

どういうことか、案内されるままに着いていけば言葉の意味はすぐに分かった。図書館探検部しか知らない入口……………つまり、本来なら入ってはいけない場所に入るという事なんだろう。まあ、仮にも魔法の本……………普通の場所には無いか。

「あ、桜咲さんだー」

「なになに、桜咲さんも一緒に行くの？」

「ええ、まあ」

明日菜さんに佐々木さん。そういえば、バカレンジャー五人の為とか言ってたけど……………嫌な予感がした。

「むっ、刹那！勝負アルヨー！！」

「今日は逃がさないでござる」

やっぱりか。バカレンジャーということは当然のようにクーフェイと長瀬もいるわけで……………今は相手をしている場合じゃないのに。

「これから侵入するんだろ？騒ぐと見つかるぞ」

「そう言っつて、また逃げるアル！！」

「……………テストが終わったら、手合わせするから」

「約束でござるよ？」

「ああ」

仕方ない。いつまでも逃げられないし……………体に経験を積ませるには、修行あるのみだ。

……………それから、さっきから気になっていたんだが、どうしてネギ先

生がいるんだろう。確かに行方不明時はネギ先生も一緒にいなかったが……ああ、それもこれが原因だったんだ。

「このちゃん、ネギ先生はどうして？」

「んー、明日菜が連れて来たんや」

「……………そう」

もしかして、ネギ先生と明日菜さんは既に仮契約を？分からないな……様子を見るしかないか、それとも、明日菜さんをネギ先生からどうにかして切り離すか。

「それじゃみなさん、行くですよ」

「……………おー……………」

……………今は、こっちに集中するか。

進んでいくうちに、徐々にトラップが物騒になっていく。盗難防止の為とはいえ、遣り過ぎだろう。後方から打たれる矢を払って、つくづくそう思う。

「このちゃん、足元にトラップがあるよ」

「ふえっ、わ！ほんとや。ありがと、せっちゃん」

「物騒だし、気を付けないとね」

「せやね〜」

ちなみに、ここまでの道中で分かったのは、ネギ先生が魔法を使えないことと、神楽坂さんが現時点では仮契約をしていないが、魔法の存在は知っているらしいこと。

図書館島が危険な場所であることは割と知られているから、対策としてネギ先生を連れて来たんだろうが……魔法を使えないネギ先生じゃ、ただの足手まといだ。とりあえず私は、このちゃんを優先的にトラップから守りつつ、着いていくことにしよう。

「着いたー!!」

「わっ、なにこれすごい!!」

それからひたすら進み続けて……ジャージで来てよかった。道なき道ばかりだから、服が汚れてしまったし。

というよりも、ネギ先生……魔法の本が珍しいのは分かりましたから、落ち着いてください。このちゃんに魔法の存在がばれます。

そう思っている間に、他の人たちが次々と本に向かって走り出す。嫌な予感がして、とっさにこのちゃんの腕を取った。

「このちゃん！」

「ふえっ？」

ガコン、と石橋が割れる。どうにかこのちゃんを引き寄せたおかげで、私とこのちゃんは巻き込まれずにすんだ。

「せつちゃん、ありがとう」

「ううん。それより、これって……」

「ツイスター、ゲーム……？」

『その通り!!』

ゆっくりとした動きで、石像が動き始めた……え、どうしようこの状況。

『魔法の本が欲しければ、僕の質問に答えるのじゃ。ただし!』
悲鳴を上げてパニックに陥る佐々木さんたち落ちた面々をよそに、
石像は私とこのちゃんを指差した。

『そちらの二人もゲームの舞台に降りてもらおうのじゃ。じゃなければ、ゲームへの挑戦も認めん』

「……ど、どないしよ、せつちゃん……」

「畏だと分かり切っている場所に、下りるつもりは無い」

『ならば、永久にこの地下を彷徨うんじゃないな。ゲームに勝てたならば、本と出口への近道を教えてやるぞい』

なんとしても、私たちを……いや、このちゃんを、その場に下した
いらしい。このちゃんを連れて脱出するのは簡単だが、その場合は
他のみんなを犠牲にすることになる。

「せつちゃん、下りよ?」

「このちゃん……」

「大丈夫やつて。ゲームに勝てばいいんやから」

「……うん」

……大丈夫だ、少なくとも、すぐに命が危くなるようなことは無
いはず。このちゃんを抱えて、石版の上に降り立つ。石像が満足そ
うに笑い声をあげた。

腹が立つ。

『では、第一問』

ゲームの内容は、英語を日本語訳したものを、ツイスターゲームの
要領で踏むだけ。ネギ先生のヒントもあって順調に進んでいたんだ

けれど

「お、さ　　る!?!」

『ハズレじゃな』

間違えた瞬間、石像が巨大なハンマーを振り下ろす。石版が割れ暗闇がぼつかりと口を開けて、私はこのちゃんを庇うように抱きしめた。

「せつちや　　」

「大丈夫」

後から一緒になって落ちてくる瓦礫を気で弾きながら、私たちは暗闇へと落ちて行った。

「ふうむ、どうしたもんかのお……」

まさか、刹那君が一緒におるとはのお。彼女の成績もあまりよろしくないから、一緒に勉強してもらおうのはありじゃが……。

「もう少し、影から守つと思っていたんじゃがの」

今回の目的は、ネギ君と生徒を地下に落とすことで、そこで集中的に勉強してもらい2・Aの最下位を脱出させること。そして、パートナー候補でもある彼女たちとネギ君に交流を深めてもらうつもりだったんじゃが……いやはや、困ったぞい。

「ん、でも刹那君も候補の一人じゃし……むしろ、よかったかのお

「？」

彼女がネギ君の味方になったなら、力強い仲間となるじゃろう。そう考えれば、予想以上の成果ともいえるの。

「ふおおおっ……」

さてさて、テストまでの三日間、みっちり勉強してもらおうじゃないか。

地底図書室で勉強会の日

さて、どうしようかな。

石像によって地下に落とされた私たちは、幸いにも湖に落とされ無傷で済んだ。気絶したこのちゃんを抱えて近場の陸地上がり、同様に落ちてきた皆さんを陸地に連れて行く。

……これ、下手すれば溺れて死んだんじゃないか？

「ん、う……」

「このちゃん、目が覚めた？」

「……あ……せつちゃん……」

「うん」

気が付いたこのちゃんに安堵の溜息。怪我は、と聞くと小さく首を振った。大丈夫なようだ。

次々と他の人も目覚めていき、一様にこの空間に驚いていた。綾瀬さんの話だと、ここは幻と言われた地底図書室……なんだとか。生きて帰れた人はいないというが、それなら誰がその存在を他の人たちに伝えただろう。

「大丈夫ですよ、皆さん！絶対に脱出できますから！！」

力強くメンバーを励ますネギ先生。落ち込んでいても仕方が無いと、とにかく勉強することになった。

都合よく食料や全教科のテキスト、キッチンにトイレと揃っている。学園側が一枚噛んでいると思った方がいいかな。

「幸せや〜」

「このちゃん……」

バカレンジャーが勉強会する傍ら、このちゃんのはのんびり読書に勤しんでいる。私は私で、勉強しつつこの地底図書室を探索していた。水浸しの本は、どういいうわけか濡れてもいないし痛んでもいない。やっぱり魔法が関わっているんだらう。明らかに魔法を示唆する本が無いことに本気で安心する。

というよりも、そろそろ本気で長に連絡を取った方が良いかもしれない。西からすれば裏切り者の私が、下手に連絡を取って長に不利益があつては困ると思つていたが……少なくとも、修学旅行までに長にこのちゃんの状況について説明しなければ。修学旅行で長に届けられる親書も、強硬派の人間を随分と刺激するものだったし

「せつちゃん、何してるん？」

「っなんでもないよ」

気づけば、このちゃんが後ろから私を覗き込んでいた。いけない、考えに集中し過ぎていたかな……。

「ご飯の準備が出来たんや。食べよ〜」

「うん」

食事は、これで四回目。外ではもう一日が経っているし、テストは明日だ。そろそろ、脱出を考えた方がいいころだらう。

「あれ、他の人たちは？」

「水浴び行かつて言つてたえ。呼んでくるから、先に食べててな」
「うん」

今度のご飯はサンドイッチ。手近な一つを取って食べつつ、耳を澄ませてこのちゃんが戻るのを待っていると、少し遠いところで騒ぎが起こったらしい。騒がしさに顔を顰めて、最後の一欠けらを口に放り込んで飲み込み、立ち上がる。

このちゃんに危険が迫った感じでは無いけれど、良い状況では無い。そう思ったところで、そのこのちゃんがこっちに向かって走ってくる。

「このちゃん！何かあったの？」

「せつちゃん！！そ、それがな……」

このちゃんの話によると、地下で私たちを落とすとした石像が現れたという。それで、このちゃんはみんなの荷物を取りに戻ってきて、これから逃げるところ。

「それじゃ、急ごうか。このちゃん、背中に乗って」

「え？」

「私の方が、足速いから。急ぐんだよね？」

「う、うん！」

逃げるだけなら、このちゃんを背負った方が楽だ。これが戦ったりだと話は違っけれど。

荷物を持ったこのちゃんを背負って水辺へ走り、他の人たちと合流する。あとは逃げるだけ、と。

『ま、待つんじやー』

「やだよー」

「ありました、滝の裏側に非常口です」

「え……？」

非常口なんて、そんな危険から逃れるための物があるんだ。思わず本気で驚いてしまった。

扉に書かれていた問題を、本を持ったクーフエイが答えて中へ入る。長い螺旋階段が上へと続いていった。

「せつちゃん、うち一人で行けるえ？」

「……大丈夫？」

「もちろんや」

追いつかれた場合の事を考えて、このちゃんの言葉に従って別れて階段を上る。壁を壊して追いかけてくる石像を眼下に捕えつつ、途中の壁に書かれた問題を解いて上を目指した。

「あつた！地上への直通エレベーターです！！」

「これで地上へ帰れるの？」

ネギ先生の言葉通り、前方にはエレベーター。これに乗りさえすれば、逃げ切れるか。

そう思ったが、大急ぎで全員が乗った次の瞬間、ブーツとブザーの音が鳴った。

『重量オーバーです』

「うつそおおお！？」

悲痛な叫びをあげて騒ぎ出すみんなが服を脱ぎだしたりする中、思う。もしも、このちゃんたちが行方不明時にこれを使って脱出したなら　一人、人数が多い。

それはつまり、どんなに頑張ろうとも誰か一人が降りなければ、助からないという事だ。

「ぼ、僕が降ります!!」

私の思考の答えを出すかのように、ネギ先生が叫びエレベーターから降りた。魔法は使えずとも生徒を守る意志は称賛しますが……それは、明日菜さんが許さない。

「あんたを置いていけるわけないでしょ!こーすんのよ!!」

ネギ先生をエレベーターに引き戻し、魔法の本を石像に向けて投げる。石像がぐらついた。落ちるまでは行かなかったが、今エレベーターが動けば逃げられただろう。

『重量オーバーです』

「なんでえええ!?!」

『ふおおお、逃がさんぞ』

「や、やっぱり僕が」

無情な機械音に、石像の手が伸びてくる。立ち上がり盾となろうとしたネギ先生の襟首を掴んで、明日菜さんに押し付けた。

「えっ」

「せつちゃん…?」

エレベーターを出た瞬間に、ボタンを押す。扉が閉まり始める向こうで、呆然としていたこのちゃんが慌てて手を伸ばしてきた。

「せつちゃ　　!!」

チンツと何とも軽い音を立てて、扉が閉まる。ガコンと動き出した

音を後ろで聞いて、笑みが浮かんだ。

「よかった」

『自分を犠牲にして他を逃がすか。しかし、儂に勝てると思ってるのかのお?』

石像が話しかけてくる。伸ばされた手をひらりと躲して、勾玉を夕凧に戻した。

「貴方の思い通りにはさせませんよ　学園長」

『ふお!?!』

斬るのは石像ではなく、階段。崩れた足場ごと落ちていく石像に背を向けて、閉じたエレベーターの扉を切り刻む。

上へと長く続く暗闇。これを上って行けば、地上へ戻れるんだよな。

「行くか」

刀を勾玉に戻し翼を広げて、私は地上へと飛び始めた。

「せつちゃん!せつちゃん、せつちゃん!!!」

「木乃香、落ち着いてっば!!!」

「いやああああ!せつちゃん、せつちゃん!!!」

開かないエレベーターの扉を叩いて、木乃香が泣き叫ぶ。私はそれを抱きしめる様にして、どうにか押さえつけていた。

「離して明日菜！！せつちゃん、せつちゃんがあああ！！」

「お、落ち着いてください、木乃香さん」

「せつちゃんー！！」

私たちを助けるために、エレベーターを降りた桜咲さん。何の躊躇も無いその姿に、私たちは止めることも出来なかった。

どういうわけか地上へと戻ってきたエレベーターはうんともすんとも言わず、扉は閉じたまま一向に開こうとしない。これじゃあ、助けに行くことも出来ないじゃない。

「せつちゃ、せつぢゃああん……」

「木乃香……」

泣きながら桜咲さん呼び続ける木乃香。幼馴染なんだと、教えてくれた。事情があつて中学で再会してから話せずにはいたけれど、つい最近、桜咲さんの方から話しかけてもらえて、以前の関係に戻れたんだと話していた。

本当に嬉しそうに話していて、話を聞いたときはこっちまで嬉しくなった。その桜咲さんが、あんなよく分からない相手を前に一人で行ってしまった。木乃香が泣き叫ぶのも無理は無いと思う。

「と、とにかく助けをよばなきゃ」

まきがそう言った、瞬間。ガシャンツ、とエレベーターの奥で音がして、みんな揃ってビクツと体を跳ねさせる。

まさか、さっきの石像が上まで追ってきた？じゃあ、桜咲さんは

そう青ざめる私の目の前で、ガンガンと何度か叩き付ける音がした後、ゆっくりとエレベーターの扉が開かれた。

「っはあ……」

扉をこじ開けて現れたのは、桜咲さんだった。

「せつちゃん　っ！！」

「このちゃん！よかった、無事でわああああ！？」

力の抜けた私の腕から抜け出して、木乃香が桜咲さんに飛びつく。受け止め損ねた桜咲さんが木乃香と二人揃ってその場に転がった。

「せつちゃん、せつちゃん！！」

「……ごめんね、このちゃん。心配かけて」

「ひぐっ、ほんまや。せつちゃんの、あほ……」

「うん、ごめんね」

謝りながら、桜咲さんは優しく木乃香の頭を撫で続けていた。とても大切そうに目を細めて、木乃香を見つめる彼女を、私たちは無言で見つめることしか出来なかった。

その翌日、テストは無事に終了し、結果は2 - Aのトップで終わることが出来た。遅刻した時は慌てたけど、ネギも無事に先生になれたし。

ただ、ちょっと気になるのが桜咲さんで。あの後、木乃香が落ち着いてからエレベーターの中を覗いたら、凄いことになってた。エレベーターの底に大きく穴が開いていて、扉の内側は酷く凹んでいた。どうやったのか聞いてみても、結局何も教えてもらえなかった。っというか、それ以前にどうやって地上まで登ってきたんだろう。まさか桜咲さんまで魔法使いとか、そんなわけないし……ああ、わか

んない。

そして、桜咲さん実は頭が良かったらしい。普通に上位に食い込んできていた。何時の間に勉強してたのか、それもちょっと気になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9232x/>

逆行した日

2011年10月28日12時07分発行